

# 保育学生の子ども理解を育む取り組みに関する一考察（2）

—子ども発見ノートを中心に—

## A Study about the Practice to Promote the Understanding of Children by Students in Early Childhood Education Course. (2)

— Focusing on the Notebook for Recording a Child —

山 崎 征 子

Seiko Yamazaki

小 田 義 隆

Yoshitaka Oda

上 村 晶

Aki Uemura

（ 要 約 ）

2009年度から「子ども理解」を深める姿勢を培う取り組みである「子ども発見ノート」の実践を開始して3年目をむかえた。本稿は、2009年度に入学した学生を対象とした継続的な「子ども発見ノート」の取り組みに関する分析の2年目にあたる。この取り組みを2年間継続したことの有効性を可視的に数値で表わすとともに、学生たちが継続して「子ども発見ノート」を記録し続けたことによって修得した学びの実態（「子ども理解」に関する成長）を考察したものである。

（キーワード）

子ども理解、子ども発見ノート、2年間の継続

### 1. 問題の所在

現代、少子化社会の進行にともない、子どもをめぐる環境が大きく変化している。それは、都市化などにより子どもの遊び場が変化し、屋外で遊ぶ習慣の減少等が考えられる。それらは、地域の教育力の低下につながり、子どもが自分の親以外と接する機会が減少していることを意味する。これらの現象を踏まえ保育者養成をめぐる状況に目を移すと、保育者を目指す学生は中学校・高等学校の職業体験での子どものふれあいが職業選択の動機となっており、それ以外の子どものふれあいは皆無に近く、子どもを理解するという思考をともなわずに入学しているのが現状である。現代の保育者養成には、保育者に求められる「子ども理解」力を身につけた保育者を養成するため、普段から学生が子どもたちと接する機会をもち、子どもを積極的に観察する姿勢を身につけさせることが求められているのである。

そこで、本学では2009年度入学の学生から、子ども理解を深める「子ども発見ノート」の取り組みを進めている。その1年目の成果は、「保育学生の子ども理解を育む取り組みに関する一考察—子ども発見ノートを中心に—」において公表した。本稿は、その後さらに1年間、取り組みを継続することによって学生に身についた学びの実態を明らかにすると共に、その有効性を明らかにする。そして、保育者養成による保育者の資質向上を目指し2年間継続的に実施したことから明らかになった今後の課題と

展望を提示していきたいと考える。

## 2. 「子ども発見ノート」の概要及び1年間実施の成果

### 2-1 「子ども発見ノート」の実践

「子ども発見ノート」の実践は、保育原理、教育原理、保育・教育実習の担当者の間での、本学の保育者養成が目指す保育者像を協議し、「子ども理解」を深めることが出来る保育者を養成しようという共通認識から出発したものである。その際、「子ども理解」を深める第一歩として、子どもを理解する姿勢作りの重要性を鑑み、その方法を模索した。その方法として、本学で過去に実践されていた「子ども発見ノート」を使った教育実践を復刻することとした。

「子ども発見ノート」の2年目の実践では、使用するノートの運用に若干の変更を加えた。これまでの、それぞれの学生が用意したノートでは、大きさがバラバラであり、回収した時に破れたり、ノートが小さすぎて補助的なシートが貼り付けられなかったりという弊害が発生したため、本学が一括で購入したB6版のノートを自分流にデコレーションして、愛着ある「子ども発見ノート」に仕上げていく方式に変更した。取り組みの趣旨は、2年間継続して日常生活において出会った子どもに目を向け、観察したことを、そこに記録することによって、子どもを理解する姿勢を育成する取り組みである。保育学生の視界に子どもが入ると自然に観察をするような保育者としての体作りを継続して実践した。

1年目の保育・教育実習の経験がない段階から始まった「子ども発見ノート」の取り組みでは、記述内容等もバラバラであったり箇条書きであったりしたが、1年間継続することによって、書く力が育った学生も増え、具体的な記述内容も①日時・発見の場所②子どもの年齢・性別・特徴③子どもの様子④感想・考察という構成に落ち着いてきている。発見ノートを記録することにより、自分自身の子どもの発見に対する成長を確認し、保育者としての成長を振り返ることができるようになってきている。

### 2-2 「子ども発見ノート」の運用に関する留意点

2009年度の実施時と同様に、「子ども発見ノート」を取り組むにあたり、計5週間の実習を終え保育者へのアスピレーションが高まる2年生の講義のはじめに改めて「子ども発見ノート」を課す意義を学生に理解させた。課題として「子ども発見ノート」に記録するのではなく、優れた保育者になるために「子ども発見ノート」に記録するということを徹底周知した。さらに、「子ども発見ノート」の提出に関しては、1ヶ月3～4つ記録することが望ましいと指導した。提出時期は、前年度を踏襲し、原則として授業者の授業時間に回収することになっているが、担当教員の研究室にて随時提出することも可能とした。

### 2-3 保育者としての子ども理解に関する3つのステージ

「子ども発見ノート」による「子ども理解」を深める実践は、1年目の取り組みと同様に保育者養成において保育者としての「子ども理解」に関する成長を、入学時から卒業までの期間を3つのステージに分けて設定している。すなわち、第1段階では、「子ども発見ノート」の取り組みを通して、子どもへの興味付けを、第2段階では子どもの内面への気づきを、第3段階では保育者としての視点で子どもを観察することを到達目標に設定している（図1参照）。

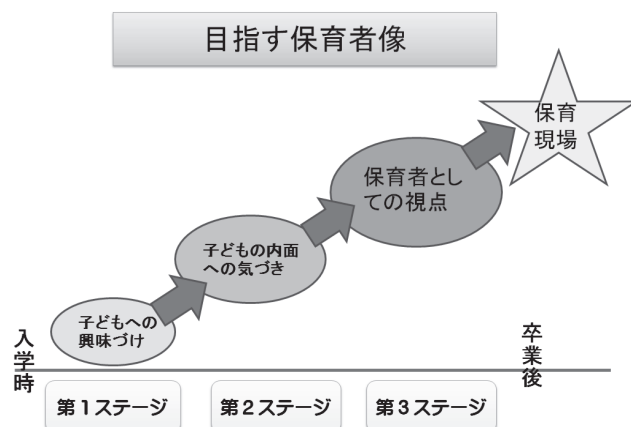


図1：子ども理解に関する3つのステージ

#### 2-4 「子ども発見ノート」の取り組みを1年間継続し見出された知見

上記の3つのステージを設定し、1年間の継続的な取り組みで学生がどのステージまで到達することが出来るかを分析した結果、以下のような知見を得ることが出来た。

##### (1) 子どもを理解しようとする姿勢形成と保育者としての視点の萌芽

調査用紙の分析の結果、着目する場面としては①親子の関わりに関する場面、②学生自身と子どもとの関わり、③子ども1人との関わりの方に保育現場や街角における子どもを観察する力がついてきている。また、発見の内容に関しては、①子どもの行動、②子どもの表情、③子どもの心情の方に着目しており、時間がたつに従い、年齢発達、行動言語、心情に関する気づきが増えていく傾向にあった。以上の分析結果から「子ども発見ノート」を1年間継続することによって、子どもと接する機会の乏しかった学生が、図1における第2ステージまでは、ほぼ全員進むことが出来るようになるということが実証された。

##### (2) 観察したことを文字に起こすことの習慣づけ

保育学生の特徴として、入学選抜においてAO入試・推薦入試など、論述によらない選抜で入学してくる学生が多く含まれている。よって、書く力をトレーニングされていない状態で保育者を目指すという特徴が全国の保育者養成校でうかがえる。本取り組みでは、エピソード数の増加傾向から、その書く力に関する弊害を改善する一助となったと考えられるが、さらに、「子ども発見ノート」を書くために客観的に子どもたちを観察し、「書く過程で子どもの心情を考え読み取ろうとする」姿勢の構築が確認された。

### 3. 研究の目的と方法

#### 3-1 研究の目的

本研究の目的は、以下の2点である。なお、本稿が取り扱う内容は2年間の短大生活における「子ど

も理解」の成長に関する縦断的研究の2年目の研究成果にあたる。

- (1)保育者の資質の基本である「子ども理解」を深める「子ども発見ノート」による実践の有効性を、可視的に数値で表すこと。
- (2)調査対象学生の「子ども発見ノート」(2年間)の具体的記述から子ども理解に関する事項を質的分析し2年間を通した学びの実態を明らかにすること。さらに、「子ども発見ノート」の取り組みの実施によって期待できる効果について考察すること。

本稿は、短大生が入学してから卒業するまで2年間継続し続けた「子ども発見ノート」の取り組みの総合的研究である。調査対象学生の学びの軌跡を2年間追跡し「子ども理解」に関する学びの実態を明らかにすることにより、これまでの「子ども理解」を深める取り組みに関する研究を、さらに実証的に明らかにする。また、前稿(山崎・小田・上村, 2011)で抽出した実習の「子ども理解」に関する園評価が向上した学生の2年目のエピソード記述に着目し、2年間にわたる具体的な質的分析を加える。

### 3-2 研究の方法

本研究の対象は、本学子ども学科2年生141名(男子3名・女子138名)であり、2010年4月から2011年3月までの間、教育課程論・幼児教育者論の授業における課題の一つとして「子ども発見ノート」の記録を課した。そして、2年間を1年生前期(A期)・1年生後期(B期)・2年生前期(C期)・2年生後期(D期)の4期に分け、各期終了時に子ども発見ノートに関する調査を実施した。

質問紙調査は、㊸子ども発見ノートチェックシートと、㊹子ども発見ノートに関する自己評価の2種類からなるものである。㊸のチェックシートでは、エピソード数・子ども発見場面・発見の内容の傾向を調査し、㊹の自己評価アンケートでは、①子どもへの興味づけ(4項目)、②子どもの内面への気づき(4項目)、③保育者としての視点(4項目)、④子ども発見ノートの効果(4項目)を、毎回調査した。また、2年生後期の最終段階では、⑤2年間継続しての総括(4項目)を追加し4件法で自己評価させ、分析した。また、自由記述欄を設け、2年間継続しての感想を自由に書かせた。それぞれの項目は以下の通りである。

- ①子どもへの興味づけ (Iの1.子どもへの意識 2.視野に入る 3.関わる意識 4.探求心)
- ②子どもの内面への気づき (Iの5.発達年齢 6.興味 7.行動による内面理解 8.表情による内面理解)
- ③保育者としての視点 (Iの9.共感 10.テーマ性 11.多角的視点 12.自己考察)
- ④子ども発見ノートの効果 (IIの1.書く力 2.出来事の整理 3.周囲への意識 4.周囲への注視 5.保育職への意識 6.継続性 7.有効性 8.活用性)
- ⑤2年間の継続的效果 (IIIの1.第1ステージ到達度 2.第2ステージ到達度 3.第3ステージ到達度 4.2年間継続による満足度：D期にのみ調査項目を加えた)

さらに、2009年度に実施した実習の「子ども理解に関する評価(園評価)」に関して成績の推移をA→A、C→A、C→Cの3群に分け、その中から学生を抽出し、その抽出学生の記述した2年間の「子ど

も発見ノート」を質的分析した。本稿は、紙幅の関係上、実習成績の変化が特徴的であった学生に限定して分析を進める。

## 4. 研究結果

### 4-1 2年間の取り組みの自己評価

4期に渡って質問紙調査の回答が得られた有効回答数119を抽出し（回収率84.4%）、1年前期終了後（A期）と2年後期終了後（D期）における各項目の平均点についてt検定で比較検討をした。その結果、発見ノートによる意識変容に関しては、子どもの内面への気づきや保育者としての視点に関する計8項目に関して1%水準で有意差が見られ、第2ステージ及び第3ステージにおいて平均値が高いことが見出された（表1・図2参照）。1年終了時には第2ステージ「子どもの内面への気づき」の向上が見られたという昨年度得られた知見を踏まえると、2年間を通して第3ステージ「保育者としての視点」の獲得に至るようになると思われる。

同様に、子ども発見ノートの効果に関してA期とD期における平均値を比較したところ、1.書く力、3.周囲への意識、4.周囲への注視、5.保育職への意識、8.活用性の計5項目に関して、1%水準で有意差が見られた（表2・図3参照）。この結果から、本取り組みを2年間継続することによって、書く力が備わる、子どもがいる場面を意識したり注視したりすることができるという活用効果を認識していると推測できる。また、保育者への意識に関して有意性が見出されたことから、2年間継続することで発見した事象を保育者としての視点で考えられるようになることが示唆された。

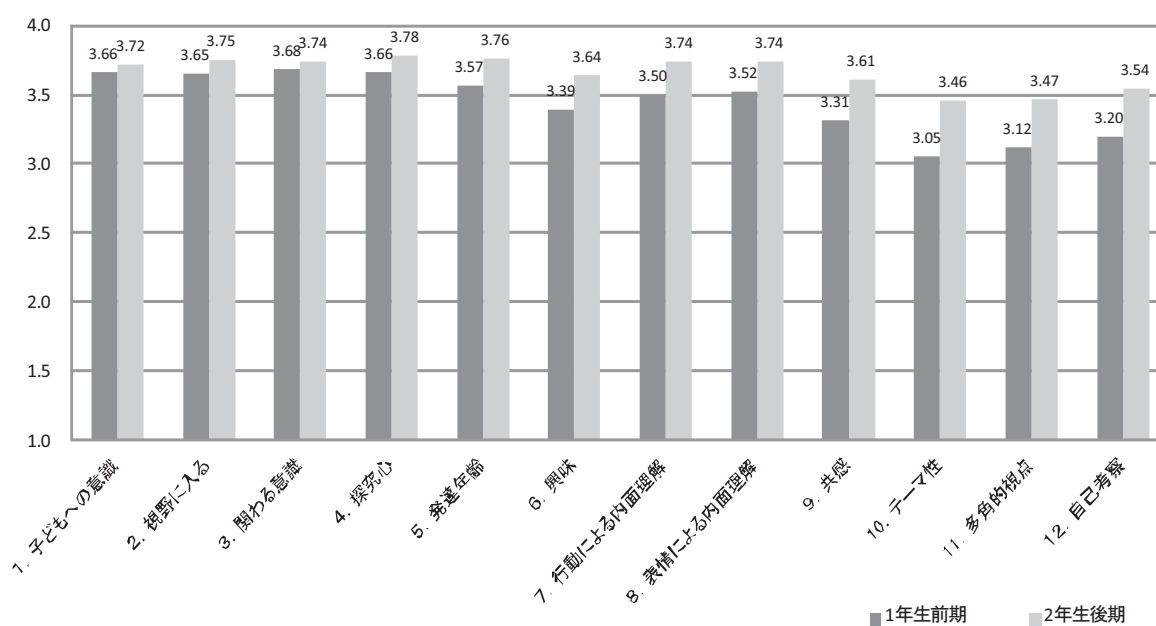


図2：A期・D期における自己評価得点の差異（発見ノートによる意識変容）

表1：A期・D期における自己評価得点の差異（発見ノートによる意識変容）

	1. 子どもへの意識	2. 視野に入る	3. 関わる意識	4. 探究心	5. 発達年齢	6. 興味	7. 行動による内面理解	8. 教育による内面理解	9. 共感	10. テーマ性	11. 多角的視点	12. 自己考察
T比	0.886	1.582	0.921	2.040	2.735	3.361	3.621	3.319	4.179	2.402	4.471	4.701
	n.s.	+	n.s.	*	**	**	**	**	**	**	**	**

表2：A期・D期における自己評価結果の差異（発見ノートの効果）

	1. 書く力	2. 出来事の整理	3. 周囲への意識	4. 周囲への注視	5. 保育職の意識	6. 継続性	7. 有効性	8. 活用性
T比	3.571	2.076	3.650	2.474	3.261	1.463	1.966	2.521
	**	*	**	**	**	+	*	**

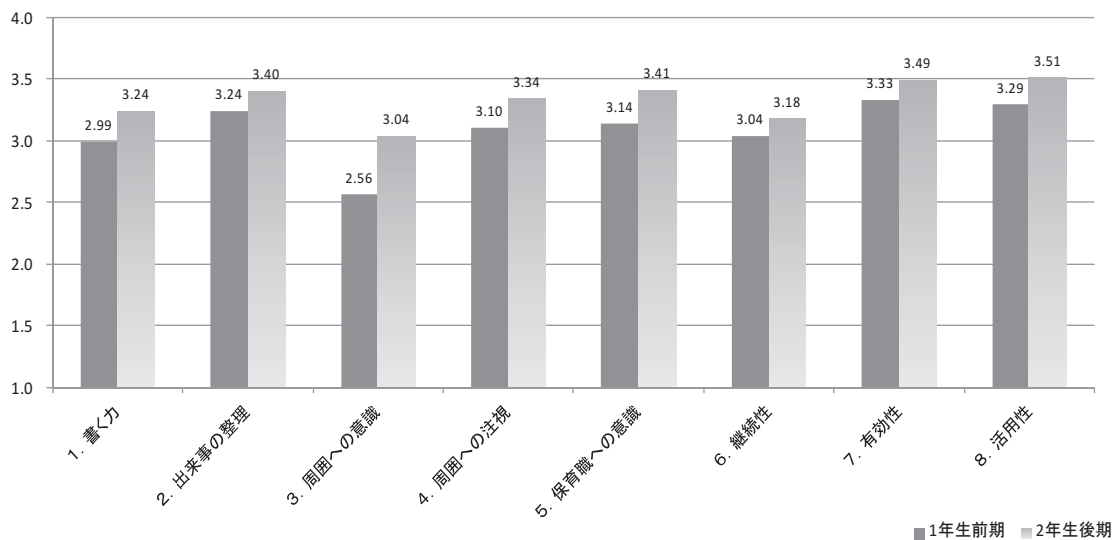


図3：A期・D期における自己評価得点の差異（発見ノートの効果）

#### 4-3 2年間の継続効果について

2年間の継続的効果を明らかにするために、2年間の最終段階であるD期に各ステージの到達度と2年間継続による満足度について4件法で回答を求めると同時に、具体的内容について自由記述を求めた。各ステージ到達度に関しては平均値が全体的に高く、子ども発見ノートを2年間継続して取り組むことによって、子どもを見ようとしたり、内面を感じ取ったり、保育者の視点で子どもを捉えることが日頃から出来るようになったと学生が実感していることが推測できる（図4参照）。

また、2年間継続による満足度に関しては、継続して大変良かったと回答した学生が全体の53%、やや良かったと回答した学生が37%であり、全体の90%の学生が本取り組みを継続する良さを実感していると考えられる（図5参照）。具体的な自由記述に着目すると、良かった点としては、子どもの存在そのものや子どもの内面を感じ取ろうとすることの意識化や、書く力の向上や考え方の幅の拡がりなどに関する意識の向上について効果があると考えられる。その反面、エピソード数のノルマ化による負担感や発見した事象をその場ですぐに記録が書けず忘却してしまう等の課題が見出された（表3参照）。

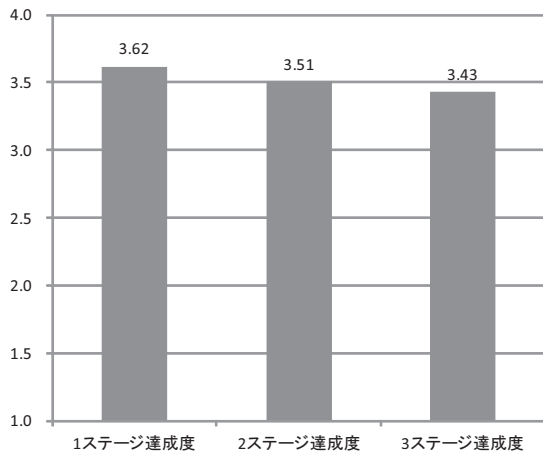


図4：各ステージにおける達成度

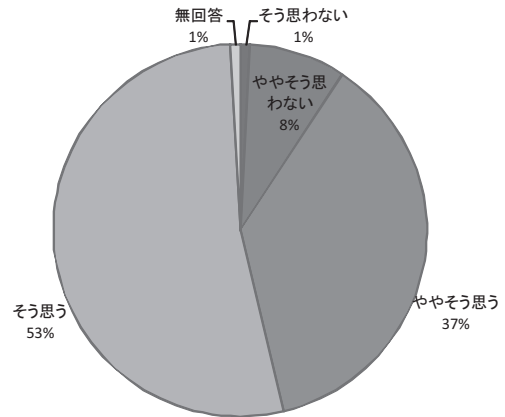


図5：子ども発見ノートの満足度

表3：自由記述から（一部抜粋）

良 か っ た 点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもを意識して見るようになり、とても勉強になった。</li> <li>・日頃子どもを見かけると、意識して見るようになった。ただ、見るだけでなく子どもの内面の気持ちを読み取る力がついたと思う。</li> <li>・子どものことをじっくり見るようになったし、子どもに対して敏感に感じられるようになった。</li> <li>・大変だったけど、子どもを見てかわいいと前は思うだけだったけど、色々な事を思うようになった。文章を書く力も前に比べついたと思う。</li> <li>・普段からよく見るようになっていて、いつも感じたとき、後で書こう!!と思って忘れてしまって全然書けなかったのが残念。でも自分の中ではたくさんの考え方ができるようになったと思うし、子どもが今どんな気持ちでしているのか、考えるようになった。成長できたかなって思いました。</li> <li>・大変だったけど、子ども発見ノートがなかったら、普段からあまり子どもに目を向ける事が無かったと思う。</li> <li>・以前より子どもの内面的な気持ちをみる力がついたと思う。</li> <li>・書くことは大変だったけれど、子ども発見ノートをすることで文章力が少しは身に付いたと思うし、子どもを見る機会も増えたと思います。</li> <li>・子どもを観察しようとするくせがついた。子どもがどう思っているのかを理解しようとするようになった。もっと子どもが好きになった。</li> </ul>
課 題 点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノルマがあったので、自分のペースでさせて欲しかった。</li> <li>・買い物時など発見ノートに書けることを見つけても書くのを後回しにしてしまうことが少し多かった。</li> <li>・2年生になると課題（卒論等）があるから、子ども発見の課題を出されるときつかった。</li> <li>・正直、長期休みの時なんかは出掛けることも少なく、子どもと出会うことはあまりなかったもので、書くのにとっても苦労しました。実習の時くらいしか、まともなエピソードがなくて。あまりやっても内容が薄かったかなと思う。</li> <li>・「1ヶ月に3つ書くように」みたいなこと言われたのには納得いかなかったけど、自分なりにマイペースに子どもを見つめることができた。量よりも質が大事だと思った。このノートは子どもを見つめる時の方法（視点）を教えてくれた。</li> <li>・1ヶ月〇個以上というのがあってきつかった。でも、子ども発見ノートのおかげで子どもを詳しく見るようになった。</li> <li>・実際に見てから書くと、その場にノートがないから、書き忘れてしまうことも多かった。しかし、子どもに目を向けることが出来、考えることが出来ていい機会になった。</li> <li>・子ども発見ノートがあることで自分が子どもに注目することが多くなった。しかし、枚数や数決められていて、苦痛に感じた。バイトで忙しくて子どもを見る機会がなくても、枚数分書かなければならぬので大変であった。</li> </ul>

## 4-4 質的分析より

学生のエピソードがどのように変容し、何を学びとっているかという具体的な記述の推移について質的分析を行った。本稿では、先行研究で抽出した学生の記述をその後1年間追跡調査し、詳細に読み取りを進めた（表4参照）

表4：実習における子ども理解評価が2年間で向上した学生のエピソードから

	発見ノートの記述	読み取れること
1年 4月	<p>【4月18日】 3歳くらいの男の子</p> <p>【様子】マクドナルドでハッピーセットの景品を持ってはしゃいでいる子がいて、お父さんがその子の手を拭いていた。</p> <p>【感想】すごく嬉しそうに景品を持って遊んでいて、⑦すごくかわかった。⑧お父さんが子どもの手を拭いているのを見て、私もそのようなことをしてもらっていたのかなあと思った。</p>	<p>⑦「かわかった」などの外面的な記述に留まっている。</p> <p>⑧親子関係に着目しながら、自分の幼少時代の親子関係を回顧している。</p>
1年 9月	<p>【9月18日】 2歳の男の子</p> <p>【様子】私が実習終了後に日誌を提出して挨拶をしに回っていて担当していたクラスにも行ったときに、男の子が「早く保育園の服に着替えて。」と私に言ってきました。</p> <p>【感想】私は、⑨実習中ジャージだったのでジャージにならないと遊んで貰えないとわかったのかなと思います。（スーツで行ったので）⑩その言葉を聞いてとっても嬉しかったです。</p>	<p>⑨「分かったのかなあ」など心情を類推している。</p> <p>⑩子どもが自分に親しみを持っていることを感じている。また、2歳児でも親しみの継続を確認し、喜びを表している。</p>
1年 3月	<p>【3月16日】 小二の男</p> <p>【様子】児童館実習で初めてであった小二の男の子。児童館に来館してきたので「おかえり」と挨拶すると「うるさい」と初めて会った私には心を開いてくれませんでした。私は仲良くなりたかったので、コミュニケーションを図ったのですが、なかなか受け入れてくれませんでした。しかし、外遊びの時にボールを持っていたA君に「一緒に遊ぼう」と言葉掛けすると「受け合えよう」と言ってくれました。その後A君から「遊ぼう」と言う言葉を聞くようになりました。</p> <p>【観察し発見したこと】最初は「〇〇先生は？」と好きな先生にしか心を開かないような言動が見られたため、実習中に仲良くなるのは難しいかもしれないと思っていた。しかし、その子の好きな遊びを通して心を開いてくれたので、⑪その子の得意なことを好きなことに入り込むことが、仲良くなる近道なのではと思った。</p> <p>【保育者としての気づき】私が仲良くなりたいという気持ちを持ち、⑫冷たい言葉を言われてもあきらめず関わろうとしたことで気持ちが伝わったのだろうと思う。「僕のことを見ていてくれる。」と感ずることができたのではないと思う。正面から向き合い気持ちをぶつけることの大切さを知った。また、その子の好きな遊びに楽しみながら取り組んだことでその子も⑬“この人と遊ぶと楽しい”と感じてくれたのだと思う。</p>	<p>⑪子どもを観察することによって、子どもの興味関心を理解することが、子どもとの関係作りにつながることに気付いている。</p> <p>⑫表面的な言葉の表現のみで判断せず、子どもを丸ごと理解しあきらめず子どもを受容する姿勢を継続することが、子どもの心を開くきっかけになることに気づいている。</p> <p>⑬遊びの楽しさを共有することで、子どもが（自分に）親近感を持つということに気づいている。</p>
2年 9月	<p>【9月19日】 5歳児女児、4歳児女児 祭りにて</p> <p>【様子】祭りを見に行くと踊っている子をたくさん見かけた。踊りながらこっちに気付き笑顔でこっちを見ながら踊ったりと、嬉しそうにしていた。踊り終えてからも、「見に来てくれたの?!」と笑顔で近寄り話しかけてくれた。</p> <p>【観察し発見したこと】この子たちは祭りで踊ることをとても楽しみにしていて、「この曲で踊る。」「こんな感じ」などと色々教えてくれていた。「先生来てね」と言われたときは行けるかわからなかったため、「行けそうだったら行くから頑張ってかわいく踊ってね。」などと話をしていて、本番の時に見に行くと「先生や!」ととても喜んでくれていた。</p>	<p>⑭子どもの心情を推察している。</p> <p>⑮大人の方は子どもには通用しない、それらを理解し保育者となったときの子どものコミュニケーションを想定し、保育者としての気づきとなっている。</p>



	<p>【保育者としての気づき】 ①私が「行けたら」と言ったため、来られないと思っていたのだろうと思う。②大人はよく曖昧な言葉を使うが、子どもたちはきっとはっきりとした言葉を求めていると思う。これからの現場では心掛けたい。</p>	
2年 12月	<p>【12月5日】 3歳の男児 スーパーにて 【様子】 車の形をしたカゴ入れに乗ってはしゃいでいた。 【観察し発見したこと】 お母さんはケータイをかけながら買い物をしていたが、子どもは楽しそうに「行け行けー！」と言いながら笑顔で乗っていた。男児は車に乗れたことを喜びに感じているようだった。 【保育者としての気づき】 ケータイをかけながら買い物をしている母が少し気になった。スーパーを回っていて、またその親子に会ったとき（10分後ぐらい）まだ電話していたので、①子どもとのコミュニケーションは図れているのかな？と疑問に思った。②その日はたまたまだったかもしれないが、このようなことがよくあるのなら少し気になる問題だと思う。（子どもの発見・言動を見逃す、子どもの気持ちを受容する機会を逃す等…）</p>	<p>③親子関係を観察し、親の子育てを推察している。保育者として子育て支援活動を想定しての観察を行っている。 ④保育者の親に対する指導に関する視点が表れている。子どもの発見・言動を見逃したり、子どもの気持ちを受容する機会をケータイが奪っていると感じている。</p>

本学生のエピソードを分析した結果、2年間の継続を通して、保育者としての観点へ移行している様相が見受けられる。すなわち、1年生の時は、入学当初や9月頃までのエピソードに関しては、「かわいかった」「嬉しかった」などの外見から抱く自己感情表記に留まっていた様子がうかがわれるが、1年後期を過ぎると、子ども発見を通して子どもの言動や特性への驚きを体験し、内面を見る基本や「子ども理解」の着眼点の基礎の獲得につながったと考えられる。また、2年生に入ると、観察し発見した内容が子どもの内面に着目するような記述が多くなっている。さらに、保育者として今後どうかわっていくかという観点の記述が現れ始めている。記述方式も2年次以降には、①日時、②様子、③観察して発見したこと、④保育者としての気づきとして定着してきており、学生自身が保育者の観点から考えようとする意識が窺われる。以上の経緯から、取り組み開始当初は子どもを発見した際の自身の感情表記が主たる記述であったが、2年間書き続けることを通して、内面を見る基本や「子ども理解」の着眼点の基礎を獲得し、その見とりを発展させながら保育者としての気づきの基礎の獲得に至ったと考えられる。

## 5. 総合的考察と今後の課題

日常生活において出会った子どもに目を向け、観察したことを記録するという方法で保育者としての体作りを目標に2年目も継続してきた。その結果、子ども発見ノートの実践においては、入学当初から卒業まで3ステージを設定したが、ほとんどの学生が、第1ステージの「子どもへの興味付け」はできたと考える。また、第2ステージの「子ども内面への気づき」は1年後期から2年生後期に渡り、個人差はあるものの到達する傾向が見受けられた。さらに、第3ステージの「保育者としての視点」獲得は、2年前期から就職後の保育者生活に至るまで時間を費やしながらか到達していくと考えられる（図6参照）。

よって、2年間継続することによって、①子どもを見る姿勢は確実に獲得することができたこと、②内面を見ようとする姿勢もほぼ獲得できたことが実証され、2年間の取組を通して「観察者の視点」から「保育者の視点」へ移行しつつあると考えられる。すなわち、エピソードを書き留めることによって、子どもに関する気づきが喚起され、保育者としての意識が変容していくことが推測される。発見ノート

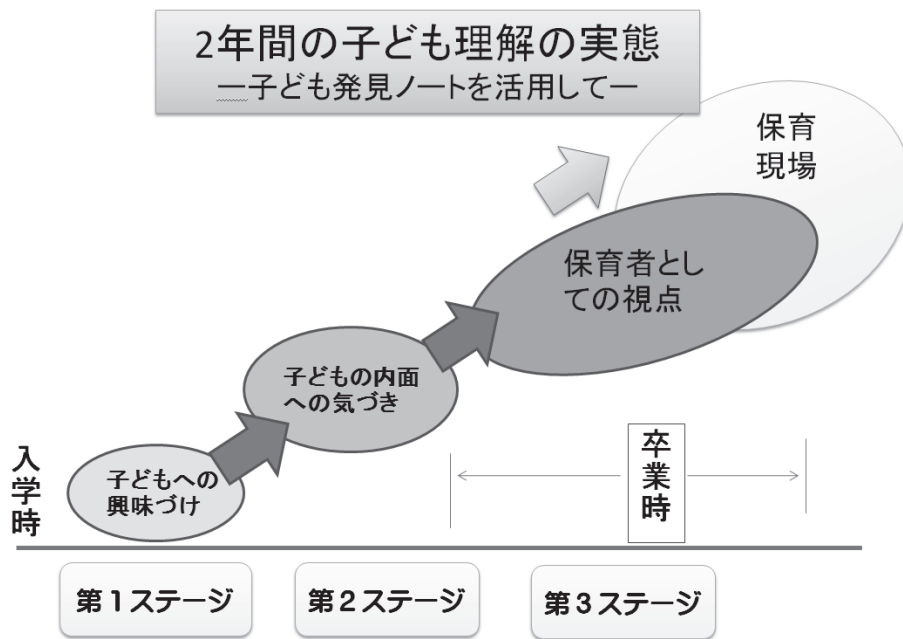


図6：子ども理解に関する3つのステージの実際について

を実施することにより、子どもへの興味・関心に意識を向けると同時に、実際の場面を書き留めることによって学生の省察を促し、保育者としての意識に推移していく効果があると考えられる。

今後の課題としては、文章表現力を含めた観察眼や保育者視点獲得への指導など、個別支援の必要性が挙げられる。「子ども理解」の深化を目指した個別支援を更に充実させるためには、教員間及び保育現場との連携等が求められるだろう。同様に、連携の際には「子ども理解」の概念の共通理解が重視されるため、保育分野における子ども理解研究の促進・発展が急務であると考えられる。

#### 【参考文献】

豊田和子・三宅啓子（1998）「保育者養成校の教育内容・方法のあり方に関する研究 —その課題と授業方法改善の試み—」高田短期大学紀要，第16号，41-65.

山崎征子・小田義隆・上村晶（2011）「保育学生の子どもの理解を育む取り組みに関する一考察—子ども発見ノートを中心に—」高田短期大学紀要，第29号，81-90.

#### 【追記】

本稿では、1～3.を小田が、4.を上村が、5.を山崎が分担執筆した。